

NATIONAL
DIET
LIBRARY
MONTHLY
BULLETIN
2017.5

国立国会図書館
月報



国立国会図書館にない本 内務省納本雑誌との出会い
世界図書館紀行 北米・欧州図書館巡行記 北米編
日本におけるマンガ研究

新連載
資料の世界の
歩き方



673号 2017年5月

国立 国会 図書館 月報

NO. 673
MAY 2017

CONTENTS

- | | | | |
|----|--|----|---|
| 19 | 海外日本研究司書研修特別講義より
日本におけるマンガ研究 | 18 | 本屋のない本
海を渡った日本茶の広告
明治・大正・昭和の海外向け小冊子 |
| 12 | 世界図書館紀行 北米・欧州図書館巡行記
北米編 | 23 | 館内スコープ
「縦書きがいいね」と君が言ったから |
| 7 | 国立国会図書館にない本
内務省納本雑誌との出会い | 24 | N D L
T o p i c s |
| 4 | 新連載 資料の世界の歩き方
中世の古文書を読んでみよう！
差出人が「いばった」文書？ | | |
| | | | 1
Poèmes de la Libellule —— 『蜻蛉集』
今月の一冊 国立国会図書館の蔵書から
巴里へ飛んだトンボ |



表紙：
逸見享『水韻譜』より
アオイ書房，昭和17
国立国会図書館デジタルコレクションでご覧いただけます。
<http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1125090>
(モノクロ画像)

Poèmes de la Libellule — 『蜻蛉集』

巴里へ飛んだトンボ

おおもり けんこ
大森 健吾



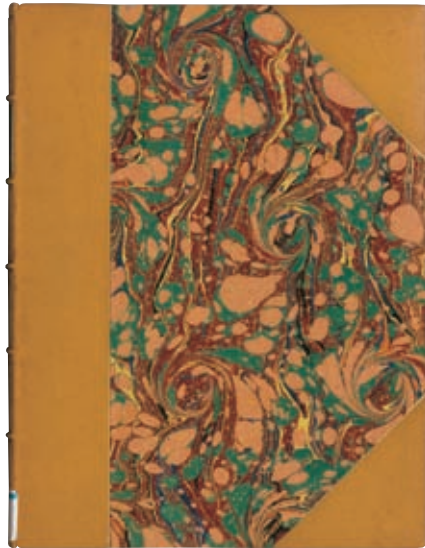
Pour cueillir la branche
Dont l'eau berce la couleur
Sur l'eau je me penche :
Hélas! j'ai trempé ma manche
Et je n'ai pas pris de fleur!
(LA PRINCESSE ISSE)

(原歌)
春ごとにながるる川を花と見て
折られぬ水に袖やぬれなむ

伊勢
(古今集 卷第一・春歌上 43)

木村毅『西園寺公望』（書物展望社・昭和8）¹は、西園寺公望（1849-1940）の半生を戯曲仕立てて回顧する。刊行当時、西園寺83歳。自由の窒息してゆく時局にあって、「最後の元老」として首相奏薦の任に当たるが、すでにその前半生は伝説の霧に紛れていた。10代で戊辰戦争に従軍の後、フランス留学を命ぜられ、青年期の滞欧は10年に及んだ。その間、パリ・コミュニケーションを目標、ソルボンヌに法律を学び、ジュールジュ・クレマンソー²、エドモン・ゴンクール³ら当代の名士と交遊した。帰朝後、留学仲間の中江兆民、光妙寺三郎⁴らと共に、自由民権運動に呼应して『東洋自由新聞』を創刊、云々。

木村の戯曲の第三幕「星旗楼」の場では、パリのカフェ・アメリカンを舞台に、西園寺、兆民、光妙寺に加え、女流作家ジュディット・ゴーチエ（1845-1917）が登場する。ジュディットは、小ロマン派の詩人テオフィル・ゴーチエの娘で、東洋趣味の鼓吹者として知られた。劇中、西園寺が執筆に協力した戯曲 *La marche de sourires*（「笑をひさぐ者」、芸者のこと）が話題となるが、兩人の共同制作としてとりわけ名高いのが、ここに紹介する *Poèmes de la Libellule*（「トンボの詩集」）である。和歌8首からなる詞華集で、1885年にジロオ社から刊行。「日本帝国天皇陛下参与 西園寺氏」の逐語訳を基に重訳とあり、巻末にその逐語訳が載る。冒頭に古今和歌集仮名序を置き、頁ごとにフランス詩の脚韻を踏んだ訳詩1首を配する。これらの訳詩については、歴代の紹介者たちによって原歌が明らかにされてきたが、逐語訳・韻文訳共に創作性の高いテキストであるため、特定に至らないものも残る。西園寺の帰国は、1880年10月であることから、逐語訳の成立はそれ以前と考えられ、ジュディットによる推敲作業には、在仏公使館付書記官として1883年に再渡仏した光妙寺の



Judith Gautier (traduits du Japonais d'après la version littérale de M. Saionzi; illustrés par Yamamoto), *Poèmes de la libellule*. Gillot, [1885] <KH9-B13>
<http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/8690318/>

発行部数は、50フランの通常版800部と200フランの豪華版20部。後者は、木箱入りの仮綴じで、ジュディットのサインと芳翠の水彩画が添えられたという。当館所蔵本は、背皮と表紙の一部が革製。表紙裏の蔵書票には、「BIBLIOTHEQUE DU CHATEAU DES ROZAIS 1908」⁷とある。ただし、サインや原画は確認できず、通常版を持ち主が装釘し直したものと考えられる。



留学時代の西園寺
 (安藤徳器 編『陶庵公影譜』
 昭和12<請求記号 306-6>)



光妙寺三郎
 (同左)



ジュディット・ゴーチエ
 Judith Gautier
 (ニューヨーク公共図書館蔵)

協力が推定されている。

挿絵のヤマモトとあるのは、パリ留学中の洋画家・山本芳翠⁵である。標題紙に描かれたトンボは、4枚の羽が紙葉に変じ、「蜻蛉集」、「千八百八十四年春」、「志由知津堂阿良者須」(「じゅぢつとあらはす(ジュディット著す)」と読み下すようである)、「山本画」の文字が見える。トンボ(あきづ)は豊穡を表す昆虫とされ、日本の古称「あきつしま」に通じることから、日本を象徴するモチーフとして好まれた。歌の掲載頁に色を変えて刷られた8種類の図柄を配するほか、多色刷りの一枚絵が7葉ある。

詩は絵のごとく——*Ut pictura poesis*。本書は、画文一体で日本美を伝えた傑作とされ、ジュディットのサロンが文壇で重きをなしたこともあって、ジャポニス

ム(日本趣味)を代表する出版物と目されてきた。しかるに、刊行直後に本書を入手したイタリアの詩人ガブリエーレ・ダンヌンツィオ⁶は、洋画を学んだ芳翠の絵に、詩文と同じ翻訳臭を感じるとした。

ちなみに、献辞は光妙寺に捧げられ、「こよなく愛す汝が鳥国の花々を手向けに 涙にくれる空の下、その色、香しい魂を、どうかお汲みあそばせ J. G.」(筆者訳)と、なかなか意味深である。光妙寺は、刊行前年の9月に、公使との不和が元で帰国命令を受け、離仏した。標題紙の「千八百八十四年春」は、たんに作画時期を示すものであろうか。パリの空の下、共に過ごした日々の記念とみるのは読み過ぎか。木村の作品は、二人の深い仲を匂わせている。

本書は、明治初年の巴里の青春を偲ぶよすがとして、今も色褪せずに残されている。



標題紙と献辞

- 1 木村毅 (1894-1979) 文芸評論家、作家。明治文化研究会同人として『明治文化全集』刊行に尽力。大衆文学研究でも知られる。『西園寺公望』の序文は、当時、リベラルな西園寺像の再発見の気運が見られたとし、小泉策太郎、白柳秀湖らによる伝記執筆を挙げている。同書は、これらの伝記や西園寺自身の筆になる『陶庵随筆』の挿話を巧みに織り込んでいる。
- 2 ジョルジュ・クレマンソー (1841-1929) 政治家。急進共和主義者エミール・アコラスの高弟で、西園寺とは同門。第3共和政下の議会で雄弁を武器に台頭し、首相として第1次世界大戦を指導。戦後のパリ講和会議で、日本全権委員の西園寺と再会する。
- 3 エドモン・ゴンクール (1822-96) 弟ジュール (1830-70) と共作した兄弟作家であり、日本美術の蒐集家としても知られる。その日記は、19世紀後半のフランス文壇・社会を総覧する資料とされ、1875年10月16日条ほかに le petit prince Sayounsi (西園寺) の名が見える。
- 4 光妙寺三郎 (1849-93) 官僚、政治家。本誌670号の本欄参照。
- 5 山本芳翠 (1850-1906) 洋画家。フルターニュのジュディットの別荘「鳥たちの野」の離れには、芳翠の装飾壁画が残されている。
- 6 ガブリエール・ダンヌンツィオ (1863-1938) 詩人、政治家。早稲田大学中央図書館蔵の『蜻蛉集』は、ダンヌンツィオ旧蔵本とされ、直筆の書き込みが残る。
- 7 Château des Rozais 同名の邸宅がフランス北部ランスにある。
- 8 斎藤昌三 (1887-1961) 出版人、著述家。発禁本の研究等で知られる。

(参考文献)

- 岩井忠熊『西園寺公望—最後の元老—』岩波書店, 2003. <GK123-H4>
 高橋邦太郎「蜻蛉集考」『共立女子大学紀要』12輯, 1966.11. pp.71-198. <Z22-185>
 高階絵里加『異界の海—芳翠・清輝・天心における西洋—改訂版』三好企画, 2006. <KC229-H156>
 吉川順子『詩のジャポニスム—ジュディット・ゴーチエの自然と人間—』京都大学学術出版会, 2012. <KR117-J6>
 尾崎有紀子『蜻蛉集』とダンヌンツィオ「西洋うた Outa occidentale」新資料をめぐって—『比較文学年誌』46号, 2010. pp.89-109. <Z12-77>

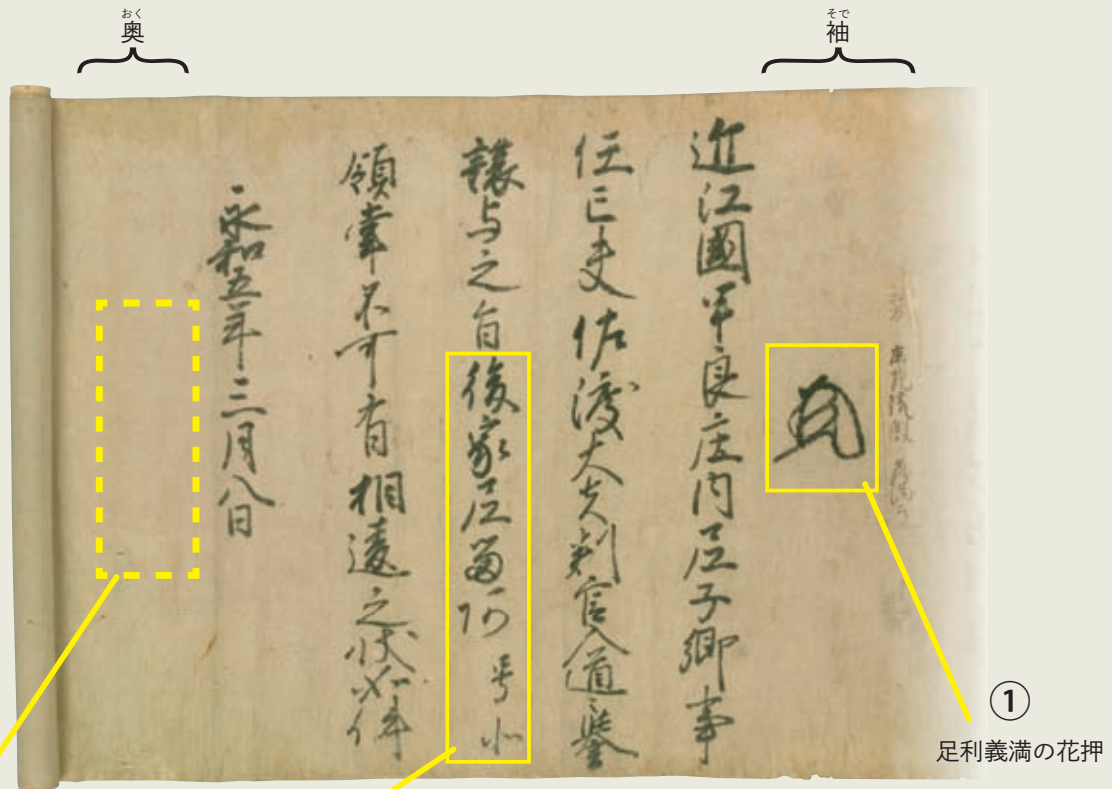


木村毅『西園寺公望』書物展望社, 昭和8<643-5>
 斎藤昌三⁸⁾の書物展望社は、凝った造本で知られる。
 本書も珍しい竹皮装である。



差出人が「いばった」文書？

きのした りょうま
木下 竜馬



② 文書の奥に受取人の名前が記されていない。尊大な御判御教書の形式。

③ 宛先 (後家尼留阿^{号北}) が本文中に含み込まれている。

永和 5 年 (1379) 3 月 8 日付足利義満御判御教書
(国立国会図書館所蔵「佐々木家文書」)
<http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/2540697/23>

中世の古文書にアプローチするときには、本文だけではなく、文書の書き方 (文書様式) を読み解くことが、よい理解につながります。中世人は、多くの文書様式の約束事を前提として文書を作っていました。伝える内容および差出人と受取人の関係によって、文書様式は複雑なバリエーションを見せます。

今回はNDL所蔵の一通の文書を題材に、文書様式の観察から差出人と受取人の関係がどれだけ分かるかを示したいと思います。図に掲げたのは、永

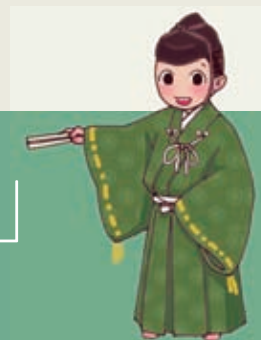


新連載「資料の世界の歩き方」では、国立国会図書館 (NDL) の所蔵する資料のうち、少し難しそうな資料を取り上げて、その「よみかた」に触れる新コーナーです。今月からしばらくは、中世、すなわち鎌倉時代から戦国時代頃の古文書を取り上げます。

よろしくおねがいします



Column

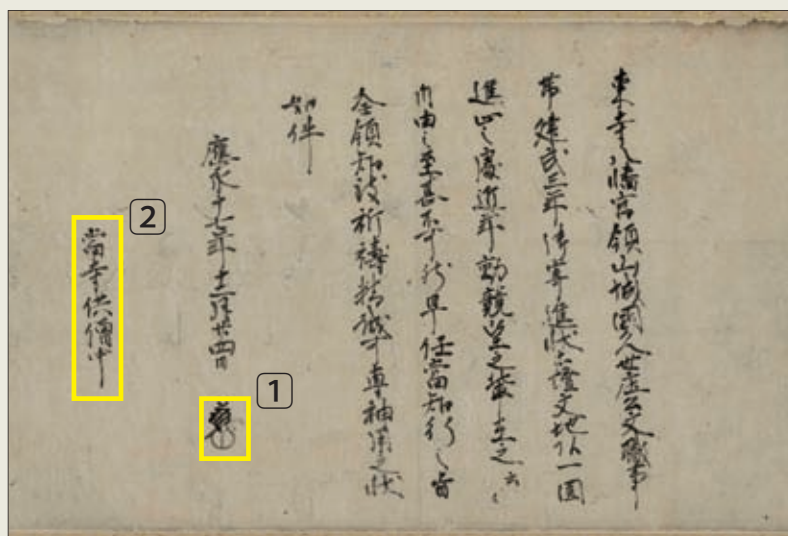


「花押」

—かおう—



戦国時代まで個人の証明に印判（ハンコ）はあまり使われず、記号的なサインの一種である花押が広く用いられました。中世において「判」といえば基本的に花押を指します。なお、原則花押は本人の手によるので、本文書のうち花押だけは義満の自筆と考えられます。その他はすべて書記役である右筆^{ゆうひつ}が書くのが通例です。



参考文書では、差出人（足利義持）の花押が年月日の下にあります①。また、宛先（「当寺供僧中」）が奥（左の余白）に書かれています②。

参考文書：応永 17 年（1410）12 月 24 日付足利義持御判御教書

（京都府立京都学・歴史館所蔵「東寺百合文書」マ函 82）<http://hyakugo.kyoto.jp/contents/detail.php?id=10733>

和五年（一三七九）三月八日付の足利義満御判御教書（以下、本文書）です。室町将軍が出す文書の形式のひとつが「御判御教書」であり、将軍自身の花押^{しはんのみぎょうしよ}（御判）が書かれるのが特徴です。差出人は室町幕府三代将軍の足利義満、受取人は北^{きた}という女性です。北の夫は幕府の有力者であり「ばさら大名」として著名な佐々木導誉^{どうよ}です。導誉の死後、北がその所領の一部を相続したことを、将軍が承認する（「安堵」といいます^{ヨラム参照}）のが、本文書の要旨です。

さて実は本文書、差出人がとてどもいばっている様式なのです。二点に分けて説明しましょう。まず、差出について。御判御教書の場合、丁寧な形式であれば年月日の下に花押（あるいは名前と花押）が書かれます。年月日より左の余白（奥）に書くと、やや尊大になります。ところが本文書は、文書の右の余白（袖）に義満の花押が書かれています①。袖に花押を書くのは、もっとも尊大な形式です。次に、宛先について。丁寧な御判御教書であれば、奥に受取人の名前が記されます。ところが本文書では、奥に宛先が書かれず



「安堵」

—あんど—



「一所懸命」といわれるように、武士にとって自分の支配する土地はとても大事なものでした。その土地の支配を権力者が保証することを「安堵」といいます。中でも將軍の安堵の文書はとても高い権威を誇ったため、受取人は大切に保管しました。ちなみに、本文書では佐々木導誉の妻である北が土地を安堵されています。当時、土地を女性が所有することはごく普通のことでした。

翻刻

(花押)

近江国甲良庄内尼子郷事、
任亡夫佐渡大夫判官入道々誉
譲与之旨、後家尼留阿^{号北}
領掌不^レ可有^二相違^一之状如^レ件、

永和五年三月八日

読み下し

(花押)

近江国甲良庄内尼子郷の事、
亡夫佐渡大夫判官入道々誉
譲与の旨に任せ、後家尼留阿^{号北}と号す^レ
領掌相違あるべからずの状件^{くだん}の如し、

永和五年三月八日

大意

(花押)

近江国甲良庄の中にある尼子郷について、亡夫である佐々木導誉の譲渡に基づき、後家である尼の留阿（北という）が領有してよろしい。以上。

永和五年三月八日



②、文書本文のなかに宛先が含まれてしまっています③。これもかなり尊大な形式です。

参考として、東寺百合文書の足利義持御判御教書を挙げておきます（以下、参考文書）。差出人の足利義持は四代將軍で、父義満の文書様式をおおむね引き継いでいます。参考文書では、年月日の下に義持の花押があり①、奥に宛先があります②。この参考文書と比べると、おなじ御判御教書でも、本文書はかなり尊大な様式であることが分かります。参考文書の受取人が京都の大寺院の東寺であるのに対し、本文書の受取人は武士の妻です。本文書の尊大な様式は、將軍の武士に対する支配が、寺に対する支配と比べてとても強固であることの反映なのです。



次回は鎌倉幕府が出した裁判の判決の「よみかた」を解説します。

(絵・正保五月)

内務省納本雑誌との出会い

国立国会図書館にない本

こばやし まさき
小林 昌樹



『空乃旅』3巻1号
(昭和17年12月30日発行)



古書愛好家の友人から「内務省というハンコが押されている雑誌が出ているよ」と連絡を受け、東京古書会館(千代田区神田小川町)にすつとんで行ったのは一昨年の年末だった。というのも、内務省の押印のある「雑誌」というのが非常に珍しいからだ。

内務省の押印のある「図書」は近年、出版史に興味がある人たちの間で話題である。千代田図書館(東京都千代田区立)で十年ほど前「内務省委託本」が大量発掘されたことは耳目に新しい。この委託本を元に図書館が学者と研究会を組織し毎年研究成果を発表してきたのは、米国の「エンベディッド・ライブラリアン」といった新しい司書業務の流れとも

符合し、感心していたところだ。

しかし、それら「委託本」はほぼ全て「図書」、つまり単行本や年鑑の類で、図書館でいう「逐次刊行物」(雑誌や新聞)を基本的に含んでいないことは意外と知られていない。新聞、雑誌もまた内務省に納本されてはいたのであったが、明治30年6月以降、帝国図書館に移管(交付)されてこなかったらしいので、新聞雑誌の納本現品は非常に珍しいものである。

古書展会場で一見して、当館の書庫で出納した憶えがある「内務省交付本」(後述)に散見された受理印とおなじデザインと分かり、さっそく何冊か買い込んでみた。

See also...

「国立国会図書館にない本 戦前から占領期の出版物」(612 (2012年3月)号)

「国立国会図書館にない本 (続編) 戦前・占領期の雑誌を求めて」(640/641(2014年7/8月)号)

「国立国会図書館にない本 (続編) 戦前・占領期の雑誌を求めて2」(663 (2016年7月)号)

納本現品の流れ（昭和前期を想定）

明治の初めから昭和20年まで政府による出版物の検閲制度があり、出版物を内務省に届ける義務が出版者に課されていた（「新聞紙法」と「出版法」による）。内地で出版される新聞紙（法制上、多くの雑誌はこれに含まれた）は発行日当日、それ以外の「普通出版物」（図書や一部の雑誌、パンフレットなど）は発行日の3日前までに、どちらも2冊、内務省まで郵送か持参しなければならなかった。

2冊のうち1冊は内務省で「正本」とされ、検閲作業上の書き込みがなされ、発禁になれば内務省の書庫へ保存される一方、「不問」（検閲をパス）となれば東京市立の各図書館へ委託された。それが現在、千代田図書館に引き継がれている「内務省委託本」と呼ばれるものである。「内務省委託本」研究は、パスした正本に残された検閲の痕跡を分析することで、検閲の実態に迫ろうとするものであった。

一方もう1冊は「副本」とされて

何も書きこまれぬまま帝国図書館へ交付された。当館に引き継がれ、「内務省交付本」と呼ばれている。当館の戦前分の蔵書の大半を占めている。

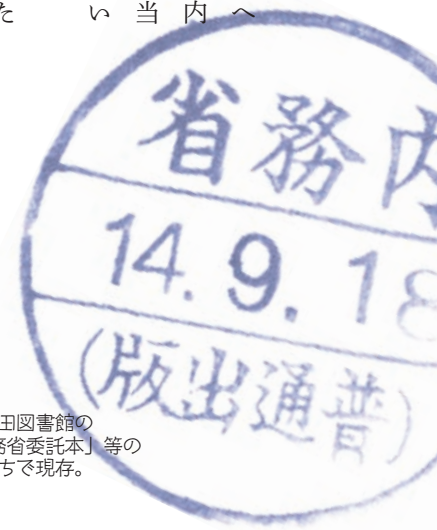
ただ、委託本も交付本も図書のたぐいがほとんどで、大量にあったはずの新聞、雑誌の納本現品が正本、副本ともどこへ行ってしまったのかはほとんど問われないままであった（正本のうち発禁号だけは現在、米国議会図書館にある⁵⁾）。その一部が七十年以上の時を経て、古書市場に出てきたのだ。

次に内務省による「痕跡⁶⁾」に注意しながら個別に紹介し、最後に今回出た納本現品の来歴について推論してみた。

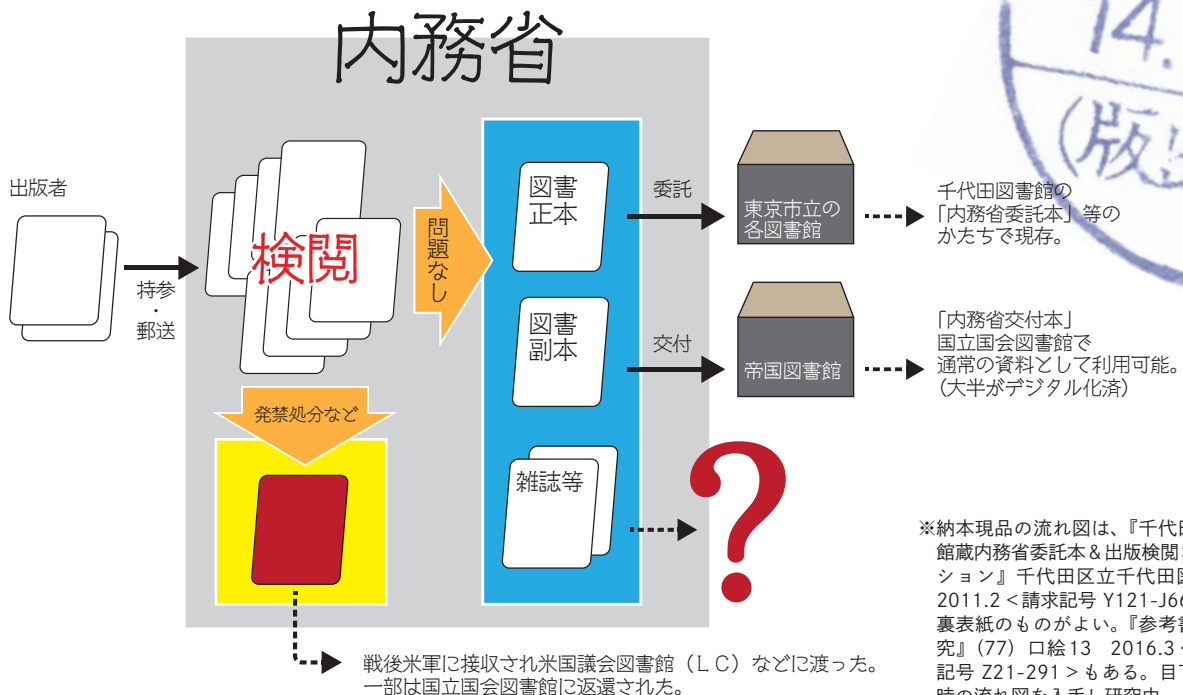
『空乃旅』

——「納本／有／新」の丸印

本文10ページの薄冊。空港についての概説や、横山隆一「そらのあれこれ」といったマンガ記事、ドイツ滞在経験がある学者によるルフトハ



検閲に使われた資料の主な流れ（昭和前期）

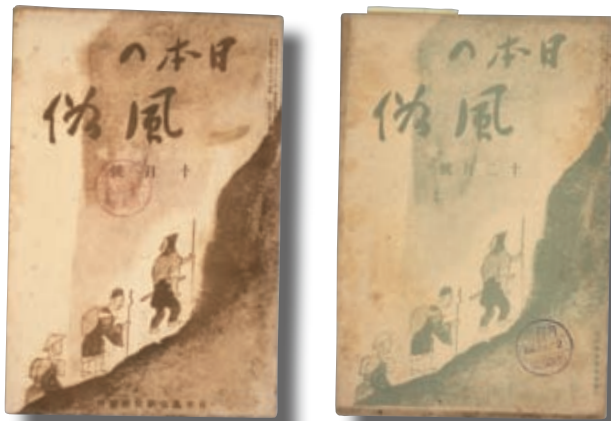


※納本現品の流れ図は、『千代田図書館蔵内務省委託本&出版検閲コレクション』千代田区立千代田図書館2011.2<請求記号 Y121-J6634>裏表紙のものがよい。『参考書誌研究』(77)口絵13 2016.3<請求記号 Z21-291>もある。目下、当時の流れ図を入手し研究中。

ンザ航空利用の回想など、ちよつとした記事が3つ。マンガ「そのあれこれ」中の「空飛ぶフクチャン」には、「敵から鹵獲した3本足のボストン型は今では日の丸に更生しましたが、私は其の飛行機にもマスコットを描きました」などと、米軍爆撃機に横山が「ノーズアート」を描いた話がある。

そう、これは大日本航空の機内誌、それも太平洋戦争中の非常に珍しいもの⁽⁸⁾。

旅客機三菱MC-20の機影も美し



『日本の風俗』3巻9号 10月号(昭和15年10月22日発行)、
3巻11号 12月号(昭和15年12月1日発行)

き表紙には「納本/有/新」の丸印。これは「新聞紙法に依拠する新聞雑誌の」納本ニハ表面ニ左記ノ印押捺セラレタシ」と指示する内務省の「納本ニ就テノ注意」に基づいて、出版者側が納本現品に押印したものの。「新」は新聞紙法が依拠法であることを示している。「内務省」の赤丸印は急いで内務省受付が押印したものが判読できなくなっている。

『日本の風俗』 ——赤丸印と青丸印

10月号の表紙には「内務省/15・10・23/『新聞紙』」の赤丸印が、12月号のほうには「内務省/15・12・2/『出版雑誌』」の青丸印が押印されている。新聞紙法に依拠した雑誌には赤丸印を押し、出版法に依拠した雑誌には青丸印を押ししたものと考えられる。同じ雑誌なのに違う押印となっているのは、依拠法を出版者側が途中で変えたか、内務省の受付者が間違えたもの。「納本/新/有(or無)」の丸印がないのは、封筒にあったか、直接持参されたから

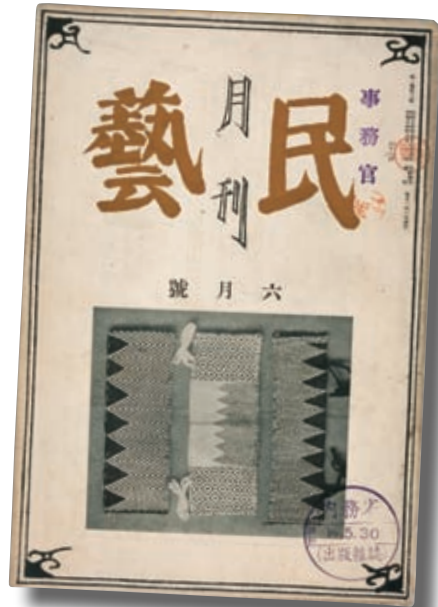
だろう。印刷された発行日より受理印の日付が1日遅れなのはご愛嬌⁽⁹⁾。この雑誌は当館では3巻4号(昭和15年4月)までしか所蔵しておらず、これらの号は欠号となっている。復刻版が刊行されているので記事は読める。

『南越民俗』創刊号

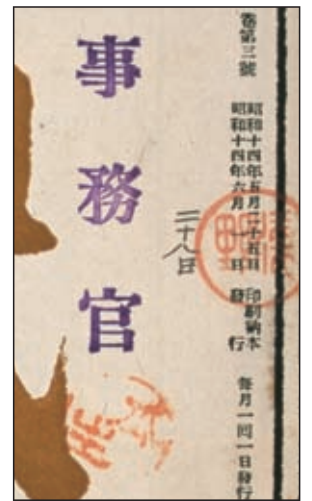
柳田国男の「郷土研究とは何か」という短文を配する表紙に、黒色「創刊」の角印と、同じく黒色の「内務



『南越民俗』創刊号(昭和12年7月1日発行)



『月刊民芸』1巻3号 6月号
(昭和14年6月1日発行)



省／12・7・3／(出版雑誌)」の丸印。
この「創刊」の角印はその押印の無
造作さ(逆さである)と、丸印と同
一の色、また内務省内月刊誌『出
版警察報』グラビアページに同じ押
印事例の写真があるので、内務省で
押したものでしょう。おそらく創刊号
を通常号よりも注意深く扱うため
のしりと推測される(ただし、この
現品の本文に検閲の痕跡はない)。

復刻版があり、他の号が福井県立
図書館などにあるが、原本創刊号の
所蔵はどこにも見当たらない。発行

者江戸喜久治による「編輯雑誌」に
創刊号は125部余りを発行したと
ある。

『月刊民芸』

——検閲の痕跡

実はこの号、当館に所蔵がある。⁽¹⁷⁾
それをここで紹介するのは、内務省
による検閲の痕跡があるからだ。表
紙に「内務省／昭和14・5・30／(出
版雑誌)」が押印されているのはよ
いとして(それでも左横書きである
あたり、同じ用途のゴム印にも変遷

があることが明瞭)、表紙に青色で
「事務官」朱で「瓜生」という丸印。⁽¹⁸⁾
当時、内務省事務官だった瓜生順
良(うりゆう・のぶよし、1905
—1982)だろうか。この検閲担
当による書き込みと同様に興味深い
のは冊子のへりに印刷されている法
定文字が訂正・捺印されていること。
奥付も同様に訂正されており、「昭
和十四年五月二十五日印刷納本」部
分の日付をペン書きで「二十八日」
と訂正し、発行者浅野長量の「浅野」
の印が押されていることがわかる。

あたりに、同じ用途のゴム印にも変遷



国立国会図書館に「ある」本
明治30年6月以降、内務省
から帝国図書館への雑誌の受
付が原則行われなくなったため、
雑誌は主に出版社からの寄贈と
購入で収集された。
<請求記号 雑49-30>

ただし受理印にあるように実際の
納本日は30日と見なすべきで、と
すると「印刷納本」日のみ建前上
の日付(28日)とすれば受理され
たのだろう。

『江戸読本』

——削除改訂版

8月号のほうには「内務省／昭和
14・7・11／(出版雑誌)」とあり、
発行3日前、つまり7日(あるいは
内務省の主張する中3日説⁽¹⁹⁾をとれば
6日)より遅いが、江戸趣味の雑誌

『江戸読本』
2巻8号8月号(昭和14年7月10日発行)、
2巻11号11月号(昭和14年10月10日発行)



- 河合郁子「北から南から 千代田図書館蔵「内務省委託本」のコレクション整備：活用の裏側」『図書館雑誌』108(9)=1090 2014.9. p648-649 <請求記号 Z21-130 >
- 従軍記者、従軍牧師などのように研究者と行動を共にする司書。鎌田均「CA1751 - 動向レビュー：「エンベディッド・ライブラリアン」：図書館サービスモデルの米国における動向」『カレントアウェアネス』No.309 2011.9.20 <http://current.ndl.go.jp/ca1751>
- 田中久徳「日帝国図書館の和雑誌収集をめぐる -- 「雑誌」メディアと納本制度」『参考書誌研究』国立国会図書館専門資料部 編。(通号 36) 1989.8. p1-21 請求記号 < Z21-291 > 必ずしも新聞雑誌全部の交付が止まったわけではないが詳細は未検討。
- 内務省交付本は基本的に副本なので受理印はないが、まれに正本が交付されることがあり、また、特 500 番代と言われる発禁本は正本なので受理印がある。
- Yoshiko Yoshimura [編] Censored Japanese Serials of the pre-1946 period. Library of Congress, 1994 <請求記号 UP67-E12 >などを参照。
- 書込みなども広く「痕跡」として考察対象にしようとする動きがある。古沢和宏著『痕跡本の世界』筑摩書房、2015.6 <請求記号 UM11-L35 > 書誌学で伝統的に考察対象となってきた蔵書印/蔵書票以外にも、「装備」がらみの受入登録印などをこれからは考察の対象とすれば、個体の来歴が判るようになるだろう。
- 主に軍用機の機首に描かれる絵画のこと。
- 『雑誌年鑑 昭和16年版』p.220には「非売」とある。所蔵館も見当たらない。
- 『出版年鑑 昭和5年版』p.645。指示だと有/新の上下が逆さである。印は出版者側が制作する。出版者側が上下を間違えたのだろう。
- 「有」というのは保証金有りの新聞紙のことで、あらかじめ2000円の保証金を国庫に預けた新聞紙は時事を論じる記事を載せてよいことになっていた。逆に言うと、2000円を預けないと時事を論じる記事は載せられない。
- 『雑誌年鑑 昭和16年版』p.268ではこの雑誌の依拠法は空欄。
- 内務省側で押印日付を変えることは考えづらい。本来、発行日の方を訂正させられる。小林昌樹「帝国図書館本における納本分の見分け方」『文献継承』(26)2015.4 pp.3-8 当館未所蔵。
- <請求記号 雑 23-152 >
- 田村栄太郎編『日本の風俗』柏書房、1981.5 <請求記号 GB82-49 >
- やや青色がまじるか。おそらく通常号に押印する印を使ったのだろう。
- 『南越民俗』複製版 安田書店、1975 <請求記号 Z8-1214 >
- 『民藝』日本民藝協会、1939-[1946] <請求記号 雑 49-30 >。3巻9号のみ <請求記号 VG1-440 >
- 検閲担当による他の書き込みがないのは不審だが、いま考察の材料がない。
- 小林昌樹、上述12の文献。
- 処分内容は不明。
- 例外はある。例えば、干城堂[編]『兵学研究會記事』干城堂：日本出版配給(発売)、[19-]-[19-]の当館所蔵分323号(昭和17年1月25日発行)には、「内務省/17.2.2 / (出版雑誌)」「納本/1 [ママ].2.18 / 帝国図書館」と2つ押印がある。次の324号は「寄贈/18.10.22 / 帝国図書館」のみだが。

であってみればご愛嬌だったのだろう、訂正などの痕跡はない。一方11月号のほうがまず受理印が一回り小さく右横書きの新品になっており、この年の夏に印鑑(スタンプというべきか)を更新した際に横書きの向きを改めたものだろう。さらにこの11月号が重要なのは、削除改訂版であることだ。受理日が印刷された発行日の10日よりずっと後の23日であること、表紙に「削除済」という青印があることからわかるように、お

そらく10日前後に検閲で削除処分が下ったのだろう²⁰、削除改訂版が作られ、それが23日に受理されたと読める。赤鉛筆で「10、14、P、15/削」、朱筆で「来〔?〕17P」とあるが、実際に削除されている(切り取られている)のは15、16ページ。してみると10月14日に15ページ目の削除処分を下した、ということか。内容は三田村鳶魚「江戸語彙」の冒頭で、残されている17ページの江戸語彙

「クスネ」の項に表紙の朱筆と同じ手でしるしがあるので、おそらく安寧秩序紊乱の廉で削除処分となったものだろう。

これらの雑誌の来歴

これらの雑誌は同時期に古書市場に出たうえ、主題に民俗への偏りがある。おそらく同一人物が所有していたものだろう。前述したように新聞紙、雑誌は内務省から帝国図書館に基本的に交付されていなかったもので、不問に付された新聞雑誌がどこ

戦前の納本実務の全体像はいまだ明らかでない。今回出てきた納本品に残された痕跡やさまざまな証拠を手がかりに、これから研究が蓄積されていくことだろう。



世界図書館紀行

北米・欧州図書館巡行記 北米編

よしいえ 吉家 あかね



see also...

「欧米国立図書館のRDA適用状況に関する調査報告」『NDL書誌情報ニュースレター』2016年2号(通号37号)

http://www.ndl.go.jp/jp/data/bib_newsletter/2016_2/article_02.html

「デジタル時代における国立図書館の蔵書構築—欧米国立図書館を対象とした調査報告—」『カレントアウェアネス』(CA1883)

<http://current.ndl.go.jp/ca1883>

平成27年11月から12月にかけて、私は北米とヨーロッパの国立図書館を訪問し、各図書館の収集業務と目録作成業務について調査する機会に恵まれました。調査結果はすでに公開していますが、改まった業務報告からはこぼれ落ちてしまうような、貴重な経験と出会いがたくさんありました。今回は、恒例「世界図書館紀行」シリーズの場を借り、二回にわたって、訪問中の出来事や、お世話になった職員の方々をご紹介しますながら、各地の図書館の雰囲気をお伝えしたいと思います。



(左) ドーム部分が改修工事中の国会議事堂
 (右) ジェファソンズ・ライブラリー。LCの蔵書の礎となったジェファソン大統領のコレクションが復元展示されています。



LC
 Library of Congress
 米国議会図書館

最初の訪問先は、米国議会図書館（以下LC）です。出発したのはバリのテロ事件直後、道中ではワシントンもテロの標的であるというニュースが入り、緊張の現地入りとなりました。とはいえ現地を歩いてみると、上空を飛ぶヘリコプターのプロペラ音が時折響き渡ることをのぞいては、とくべつ物々しい雰囲気を感じません。首都が厳戒態勢下にあることを報じるニュースも流れたようですが、

地下鉄も特別な警備をしているようには見えませんし、街のひとたちも、いつもと同じといったふうで足早に歩いています。さすがに政府機能の集まるLC周辺では通常より警戒態勢が強化されていますが、ごみ収集のおじさんと警官が和やかにおしゃべりしているのを見ているうちに、私の緊張もほぐれてきました。

LCの入口で所持品検査と身体検査を終えた後は訪問本番、職員の方々への聞き取り調査です。アジア部門の伊東英一さんとウォーミングアップ・インタビューを終え、初の英語インタビューを前に、緊張の頂点にいた私を柔らかな笑顔で迎えてくだ

さったのは、蔵書構築局のロバート・ダルダーノさんとクリスティ・コンクルさん、メアリー・バックナムさんです。

ダルダーノさん



ダルダーノさんはLCで勤務する傍ら、LGBT（レズビアン・ゲイ・バイセクシャル・トランスジェンダー）の社会運動に深く関わってました。運動を通して収集した資料はジョージ・ワシントン大学の図書館に寄贈され、「ロバート・ダルダーノ・ペーパー」として公開されています⁽¹⁾。勤め先であるLCに寄贈しなかった理由をたずねると、ダルダーノさんのコレクションは、主にワシントンD.C.での活動に関わるものなので、地域資料を多く所蔵している地元の大学を寄贈先として選んだということでした。LCは国立図書館として、国家全体に関する資料を収集していることも強調されました。

また、ダルダーノさんのお父様は第二次世界大戦と朝鮮戦争に従軍した経験をお持ちだそうで、LCによる、退役軍人の記録プロジェクトには、ご本人によるオーラルヒストリーが収録されています⁽²⁾。ダルダーノさん一家の歴史には、アメリカの一面が凝縮されているように興味があります。

コンクルさんとバックナムさんは、それぞれ女性学のスペシャリスト、録音資料のキュレーターとして長い経歴を持っていますが、蔵書構築局に配属替えとなり、未経験の業務に取り組んでいるとのことでした。基本的に、LCでは職種や部局を大きく超える配置転換はないそうで、おふたりのケースは、組織再編を受けた例外的措置のようです。

さて、天下のLCにひとり乗り込むことへの恐れがようやくやわらいできたところで、さらにそれをぬぐい去ってくださったのが竹内康治さんです。

竹内さんは、米国のライブラリー・スクールを修了した後、大学図書館等への勤務を経てアメリカ国籍を取得、現在はLCで日本語資料の書誌作成を担当していま

(1) "Guide to the Robert Dardano papers, 1986-2010, Collection number MS2165" <https://library.gwu.edu/ead/ms2165.xml>
 (2) "Robert Nicholas Dardano, Sr. Collection" <http://memory.loc.gov/diglib/vhp/bib/loc.natlib.afc2001001.7.4434>



す。新しい目録規則であるRDA導入にあたってのチームリーダーのおひとりで、周囲から厚い信頼を得ています。竹内さんは「いやあ別に・・・」といったボンボンした口ぶりで、私の気張った質問を、絶妙にかわしながらも、丁寧に、時折さらりと辛辣な指摘をまじえながら回答してくれます。その独特なテンポに引き込まれてすっかりくつろいでしまい、私にとってはとても愉快なインタビューになりました。竹内さんは時差出勤をしているため、この日は3時で仕事は終了。時差出勤は珍しいことでなく、とくに車通勤の職員は滞

滞を避けるため、早出早帰りが一般的とのこと。週2回のテレワークも可能で、たとえば目録作業者は各自担当する資料を自宅に持って帰ることができるのだそうです。ちなみにLCでは定年退職の規定がなく、ポストが空いたときのみ採用があるとのこと、訪問の時点で竹内さんのチームでは12年間新規採用がないとお話でした。(昨年はようやく新規採用があったそうです)。

翌日の館内ガイドツアーでは、驚きの邂逅がありました。ツアー終了後、名前を呼ばれて振り返ると、見知った顔がそこに。以前NDLで非常勤職員として働いていた方で、LCの館内ガイドボランティアの修行中なのだそう。LCの運営は、元職員をはじめとする多くのボランティアに支えられているそうですが、国籍は不問のようです。外国籍の人びとが国立図書館の案内をするということを日本に置き換えて考えてみると、興味深いところです。

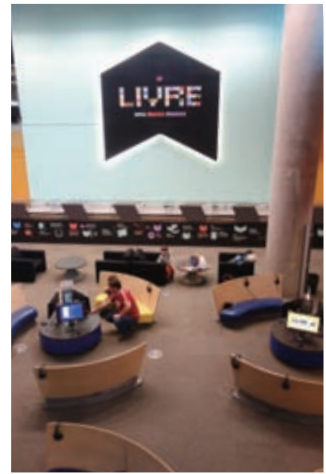


(左) トマス・ジェファソン館のドーム型主閲覧室。
(下) トマス・ジェファソン館の大ホール。階段側面に並ぶ小児像は、一体ずついろんな職業をモチーフとしています。



お昼はマディソン館の上層階にある、見晴らしのよいカフェテリアで。スノーコーナーでは、その名もLCロールを発見。ネタはえびの天ぷら、きゅうり、カニカマ、アボカド、さらには魚卵というダイナミズム。





BAnQ

Bibliothèque et Archives
nationales du Québec
ケベック州立図書館・文書館

公共図書館にあたる部署で、
貸出用コレクションの目録作成を統括する
メラニー・デュマさん。
こちらの部屋では、ケベック州出版物の
目録作成を担当する部署の方針とは異なり、
迅速性を第一としているそう。



次に向かうはカナダのモントリオールです。フランス語圏のこちらでは、納本図書館と公共図書館の機能を併せ持つケベック州立図書館（以下BAnQ）を訪問しました。BAnQは、ケベック州で出版された本を収集・保存するケベック州立図書館と、貸出サービスを行うケベック公共図書館が合併して2005年に誕生しましたが、当時は合併に反対する動きもあり、少なからず混乱が見られたとのこと。そんななかで蓋を開けてみると開館初日は1万8千人もの利用者が来館し、その後現在に至るまで館内はひっきりなしに利用者が行き交う状況で、結果的に組織再編は大成だったそうです。

同じ館内には、州立図書館に当たる部署が収集するケベック州出版物を扱う部屋もあります。貸出は行っておらず、館内閲覧のみ可能です。貸出サービスを行っている公共図書館エリアとは対照的に、ひっそりと静まりかえっています。

合併から11年を経た現在も、州立図書館、州立文書館、公共図書館にあたる部署はおのの独立しているため、各部署間の人事異動はほとんどないようですが、合併によって組織の風通しがよくなり、外部機関からの中途採用も解禁されたそうです。

ミレイユ・ラフォルスさんとダニエル・パラダイスさんのおふたりも、他の図書館などに勤務した経



歴をお持ちです。おふたりの仕事場は、市民でにぎわう本館ではなく、4キロほど離れた工業地区に位置する別館です。

納本・保存課長のミレイユさんは、ホテルから別館まで街歩きを楽しみながら向かいたいという、私のやる気に応えて、ルートマップを事前に送ってくれました。迷ってしまわないよう、地図に目を凝らしながら、枯れ葉の舞う静かな住宅街を抜けて別館に向かいます。1時間ほど歩いて別館の扉を開けると、想像どおり、にこやかな笑みを浮かべるミレイユさんに迎えられました。

ダニエルさんは、もともと音楽資料の目録作成を専門としていますが、最近は資料分野の壁を超え、新しい目録規則であるRDA導入のリーダーとして忙しい日々を

送っているそうです。眼光鋭くストイックな仕事人のダニエルさんですが、お昼ときにはふわりとした雰囲気の良いお兄様に変身。

市の中心部にある本館では、BANQ 開館10周年を記念した「夜の図書館」という体験型イベントが開催されていました。森のなかの閲覧室というコンセプトの空間で3Dメガネをかけると、そこは古今東西の図書館の心臓部。三次元空間が再現されていて、360度ぐるりと見渡すことができます。焼けゆくアレクサンドリア図書館を炎のなかから眺め、サラエボ国立図書館では砲撃音に囲まれ、果ては長谷寺の文書庫の静寂のなかへ——。時空を超えて10の図書館を巡ることのできる意欲的な催しでした。

次の訪問先は、カナダ国内の出版物とカナダ関連の記録を収集しているカナダ国立図書館・文書館(以下LAC)です。本館があるオンタリオ州オタワから州境を超えて、事務棟と資料保存センターのあるケベック州のガティノーに向かいます。

今回LACを訪問するにあたり

「夜の図書館」



テロ犠牲者に弔意を示すため、トリコロールに彩られたモントリオール市庁舎



LAC

Library and Archives
Canada
カナダ国立図書館・文書館



資料保存センターで行われている文書整理作業



RDA情報掲示板



国内各地から送られてくるアーカイブ資料



目録作成チームのみなさん

音楽資料の収集を担当している
ジョセフ・トリヴェールさん。
今年1月に公開された
グレン・グールド生誕85周年
記念企画の一部を担当されたそう。



"Glenn Gould: Remixing the Classics"
Library and Archives Canada.
<http://www.bac-lac.gc.ca/eng/news/podcasts/Pages/glenn-gould-remixing-classics.aspx>



ては、本来意図していた調査とは別に、LACの現状を確かめたいという思いもありました。LACは2012年に予算が大幅に削減され、サービス縮小を行いました。それに対し、図書館界内外から多くの批判が寄せられました。そうした騒動からしばらく経った現在のLACを知りたいというのが、望月理絵さんと朴正恩さんです。職員ひとりひとりの負担が重くなり、いろいろな作業が滞りやすいこと、国立図書館として積極的な業務体制を保つ余裕がないことが、おふたりの話からうかがえました。

新首相が就任した直後だったこともあり、状況が好転する可能性があると思うかどうか、さらにたずねてみたところ、答えはイエス。トルドー首相はさっそくオタワにある本館を視察したそう、職員のなかでも期待が高まっている様子でした。訪問から1年以上経った現在、望月さんによるとLACは少しずつ良い方向に向かっていくとのこと。

訪問時、望月さんは2012年以降に閉鎖されたカナダ各地のアーカイブから寄せられる資料の受入作業を担当していました。激務を嘆きながらもLACをからりと明るく皮肉る口ぶりに、私は何度も笑われました。現在は、以前から希望されていた電子書籍部門に異動されたそうです。

朴さんは日本の大学で講師をなさっていた経験があり、日本語はおてのもの。車でオタワまで送っていた後、零下の気温のなかでわざわざ窓を開けて挨拶してください、そのまま窓を閉めずに去って行かれた朴さんのやさしさは忘れられません。

付き添ってくださったおふたりの掛け合いは愉快でこちよく、とても楽しい訪問になりました。

(つづく)

本屋に

ない本

立春から数えて八十八夜のちようど五月の下旬、青く芽吹いた新茶の摘み取りは最盛期を迎える。お茶は平安時代に日本に伝来して以降、日本の文化に深く根付いてきた。しかし開国後の明治初期、お茶は生糸と並んで多く輸出され、重要な輸出産業の一つだったことは意外と知られていないのではないだろうか。当時、日本茶は主にアメリカに輸出され、中国のウーロン茶やインドの紅茶などと市場シェアを争っていた。そこで、日本茶への需要を喚起するため、広報活動が重要な役割をを持った。

本書は、明治末から昭和戦前期にかけて茶業団体によって作成された、日本茶の宣伝パンフレットを集めたものである。冒頭部分では概説として、日本茶広告の変遷をまとめている。この時期のアメリカでは、異物が混入した粗悪茶や、不正に着色された着色茶の流通を取り締まる法律の整備がなされていた。こうした状況下で、各都市に喫茶店を出店したり、新聞広告や雑誌広告を打ったりと、幅広い手法で広報活動を展開していた様子が紹介される。

次いで7タイトルのパンフレットを取り上げ誌面を掲載し、抄訳を付すとともに、特徴や内容について解説を行う。パンフレットはいずれも英語で記載されており、お茶のいれ方を紹介するもの、お茶に含まれるビタミンCなどの成分やその効能を紹介するもの、日本の文化や風習をあわせて紹介するものなどそれぞれ特色がある。さらに和装の人物や富士山など、日本を意識した写真や絵図もカラーで多数掲載されているため、見た目にも美しい。様々な手を使って、なんとか海外の読者の興味を惹こうとする、制作者の思いが伝わってくる。こうしたパンフレットは、博覧会等で配布されていた。

本書で取り上げられたパンフレットは、東京と静岡の茶業会館とお茶の郷博物館が所蔵しているもので、同会館および同博物館が所蔵しているパンフレットは合計してもわずか10冊程度と少ないことである。パンフレットは広報目的で作成されたため、残部の多くは消耗品として廃棄され、残されたものは少ないようだ。本書は、当時を知る手がかりとして、散逸したパンフレットの保存を進める点でも有意義な試みといえるだろう。

本書には続編として、お茶に関する大著『*All about tea*』から広告に関する章を翻訳してまとめた報告書がある。日本茶広告の歴史について、時系列に沿ってより詳しく説明がなされている。本書とあわせて読むことで、明治以降のお茶の歴史を振り返る際の助けとなる資料だろう。

(村松克洋)



海を渡った日本茶の広告 明治・大正・昭和の海外向け小冊子

静岡茶共同研究会 編 小二田誠二 監修
2015.3 113p 30cm
<請求記号 DM235-L12>

- (1) 本書の中で紹介されている小冊子“THE CUP THAT CHEERS”については、デジタルコレクションで関連の資料“Japan tea: the cup that cheers”をご覧ください(国立国会図書館及び図書館送信参加館内で提供しています)。
<http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1901127>
- (2) William H. Ukers: *All about tea*. New York: The Tea and coffee trade journal company, 1935.

国立国会図書館は、法律によって定められた納本制度により、日本国内の出版物を広く収集しています。このコーナーでは、主として取次店を通さない国内出版物を取り上げて、ご紹介いたします。

日本におけるマンガ研究

国立国会図書館では、海外で日本資料を扱う機関の司書等を対象とした海外日本研究司書研修を実施しています。その一環として、この1月に関西館で特別講義を行いました。この講義では、海外においても関心の高い研究テーマの一つである日本のマンガ研究について、歴史と動向を振り返りました。その一部をご紹介します。

講師は、京都精華大学国際マンガ研究センター／京都国際マンガミュージアム研究員の伊藤遊先生です。伊藤先生には、前年の同研修で京都国際マンガミュージアムへ訪問した際にご対応いただき、その際のレクチャーが大変好評だったので、今回講師としてお招きしたものです。



講師：

伊藤 遊（いとうゆう）

1974年、愛知県生まれ。大阪大学大学院文学研究科博士後期課程単位取得退学。現在、京都精華大学国際マンガ研究センター／京都国際マンガミュージアム研究員。専門は民俗学・マンガ研究。

民俗学におけるテーマは、「路上観察」の元祖「考現学（こうげんがく）」の方法論研究。

「マンガ研究」の登場とその背景

日本のマンガは戦後を通じて大きく成長しましたが、1980年代までは「大衆文化」「サブカルチャー」としてやや低く扱われがちでした。こうした見方が変わるきっかけとなったのは、1989年の手塚治虫の死です。死亡記事が新聞の一面に大きく取り上げられ、著作が教科書に収録され、国立美術館で展覧会が開催される等、社会的に大きなインパクトを与えました。これらを通じて、手塚の業績が再評価されるだけでなく、マンガ文化そのものに対する社会的認識が大きく変わり始めます。

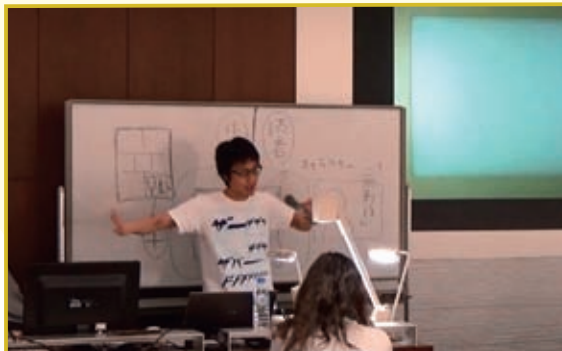
こうした認識の違いは、マンガの造本にも現れています。1974年に刊行された『ブラック・ジャック』の単行本はソフトカバーで、「恐怖マンガ」等と銘打っていましたが、手塚の死後に装いを新たにして刊行された本では表紙に写実的なイラストを使用し、ハードカバーにするなど、文芸書のような装いになっています。

一方で、マンガを楽しむだけでなく学術的に研究しようという動きが、1990年代後半頃から、学術機関に所属する研究者たちの中で出てきました。2001年には日本マンガ学会が設立されました。

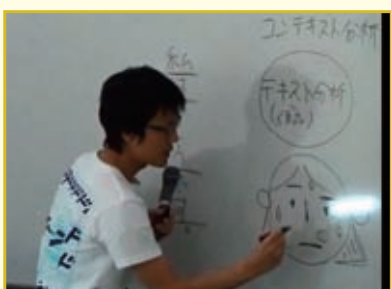
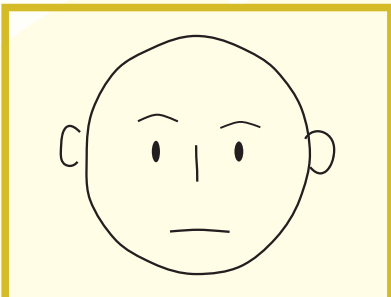
並行するもう一つの流れとして、2000年代初頭、マンガを含め日本の様々なポップカルチャーが海外、特に欧米でも人気を博すようになります。2002年の小泉純一郎首相(当時)による「知的財産立国宣言」などを受けて、マンガは海外で売れるコンテンツであり、グローバルな経済競争における有望な商品であると認識されるようになりました。こうした産業面からの注目を背景に、国や地方自治体による法的整備が行われるなど、公にマンガをバックアップする仕組みができていきました。この頃から、京都国際マンガミュージアムや北九州市漫画ミュージアムを初めとするマンガの文化施設が各地に作られるようになりました。



京都国際マンガミュージアム



マンガ表現論



「マンガ研究」マッピング

マンガはどのように研究されているのでしょうか。人文・社会科学の研究方法には、作品自体を研究対象としたテキスト分析と、作品が作られ、読まれる社会構造を研究対象としたコンテキスト分析があります。マンガの場合、前者の例には、夏目房之介らによるマンガ表現論があります。たとえば人の顔を描くとき、汗のマークをつければ焦っている、縦線を入れれば青ざめている（左図参照）といったように、マンガ独特のビジュアル的な文法に沿って論じる試みです。後者の例には、マンガを生み出す産業構造に注目した中野晴行や、マンガへの糾弾や規制など、マイナスイメージも含む社会的評価を取り上げた長岡義幸などの研究があります。またマンガ史研究は、清水勲と米沢嘉博が双璧です。またこれらに加えて、既存の研究分野、たとえば社会学や文学などの理論をマンガに応用した研究も行われるようになりました。

（※次ページ文献リスト参照）

マンガ評論か、マンガ研究か

マンガ研究のような若い研究分野においては、研究者の意識も重要な問題です。1970年代頃から行われてきたマンガ評論は、好き嫌いや「私語り」など、個人的な営みの側面も持っています。しかし学術的研究として大学等の社会的制度の中に位置づけられれば、個人的な思いをある程度離れて、いかに集合的な知識を蓄積し、新たな知見を紡ぐかという観点が求められます。現在のマンガ研究においては、その両方が混在している状況です。

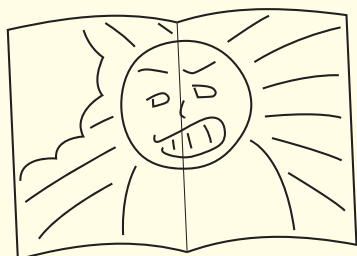
プライベートな思いと、学術研究としての姿勢の葛藤。それがマンガ研究の困難でもあり可能性でもあって、そういう葛藤のある時代が続いた方が面白いと思っています。

質疑より

— アメリカの大学図書館でもマンガを所蔵しています。海外のグラフィックノベルやコミックスと比べたとき、日本のマンガの特異性は何かでしょうか？
(研修参加者からの質問)

日本のマンガでは、ストーリーとキャラクターという二つの要素のうち、後者に非常に重点を置いています。たとえばフランスのマンガではコマの中にキャラクターの全身が描かれ、背景も描かれています。これに対して日本のマンガでは、人物の表情が中心で背景はしばしば省略され、読者はキャラクターに感情移入しながら読むようにできています。

また、このような特徴から、キャラクターだけを作品から切り出して別のストーリーを作る二次創作が容易になります。読者と作者の境界線が曖昧であるということも、日本のマンガ文化の特徴です。



全身や背景を描かずにキャラクターにクローズアップするのは、日本のマンガ特有の表現。

「マンガ研究」オススメ文献（講師より）

(人文・社会科学の研究手法（テキスト分析）)

- ・夏目房之介 著『手塚治虫はどこにいる』筑摩書房、1992 *
- ・伊藤剛 著『テヅカ・イズ・デッド』NTT 出版、2005 **

(人文・社会科学の研究手法（コンテキスト分析）)

- ・鶴見俊輔 著『漫画の戦後思想』文芸春秋、1973
- ・中野晴行 著『マンガ産業論』筑摩書房、2004
- ・長岡義幸 著『マンガはなぜ規制されるのか』平凡社、2010
- ・永井良和 著『マンガ<環境>論』（現代風俗研究会編『現代風俗'93 マンガ環境』リポレポート、1993 †）

(マンガ史研究)

- ・清水勲 著『漫画の歴史』岩波書店、1991
- ・米沢嘉博 著『戦後少女マンガ史』新評社、1980 *
- ・米沢嘉博 著『戦後SFマンガ史』新評社、1980 *
- ・米沢嘉博 著『戦後ギャグマンガ史』新評社、1981 *
- ・米沢嘉博 著『戦後怪奇マンガ史』鉄人社、2016

(社会学における理論を応用した研究)

- ・岩淵功一 著『トランスナショナル・ジャパン』岩波書店、2001 ***
- ・堀あきこ 著『欲望のコード』臨川書店、2009

* ちくま文庫に収録 ** 星海社新書に収録 *** 岩波現代文庫に収録

† 国立国会図書館では逐次刊行物扱い<請求記号 Z8-1440>

海外日本研究司書研修

海外日本研究司書研修について、詳しくは、本誌664/665（2016年8/9月）号「日本研究司書を支える研修の取り組み」をご覧ください。今回の研修には、アメリカ、韓国から、日本研究司書が参加したほか、この特別講義は、関西館において一般の方にも公開しました。



この原稿は、ワープロソフトで、A4横書きで書いている。業務で書類を作るときはいつもそうだ。そしてたいていの場合は、内容以外にも、「カッコの全角と半角が混在している」「インデントが揃ってない」などと、体裁に指摘を受ける。今思えば、そんなのごく些細なことだった。

出版物の紙面を作るのは、もっと複雑で緻密で、奥深い世界なのだった。

総務課編集係に異動すると、DTPソフトの研究を受ける。「字送り」「行送り」「ベースラインソフト」「字取り」「約物」「カーニング」「トラッキング」……。カッコの全角半角なんて、それだけじゃ意味がないとはじめて知った。前後にどれだけ「アキ」を入れるか、もしくは「詰め」るか、禁則処理はどうするか。見え方が全然違ってくる。普段、いろいろな出版物を目にしても、細かな違いに気付くことはまずない。しかし、緻密な調整がきちんとされたものを無意識に「美しい」と感じている。それは、日本語の文字を「組む」ことの長い長い伝統のおかげだったのだ。

そして、日本語は縦組み（縦書き）のほうが圧倒的に読みやすいということも知った。参考書に

よると、横組み（横書き）は読みづらいため、一行の文字数を縦組みよりも少なくしなければならぬそうだ。

ためしに縦組みで紙面を作ってみた。「縦組みにしようと思っただけ」と言うと、「え？ 縦？ なんて？」といぶかしがる人も、紙面を見せると

「いいね」「広報誌っぽい」「高級感がある」と驚く。そうか、業務で使用しているA4横書きにあまりにも慣れ過ぎてしまっているに違いない。来る原稿来る原稿、みんな固いのも、業務のためにワープロソフトで横に書いたものを、そのまま書き直しているせいなのでは？ 縦にすれば世界観が変わるかも？

さて、この原稿を縦書きにしてみよう。あらっ、何もしないと「A4」や「DTP」が寝てしまうけど、どうすればいいのかな。「A4」と一文字ずつ縦にするか、「A4」と横並びで90度回転させるか、ほほう、これらを「縦中横」と言うそう。「A4」と漢数字にする手もある。うーん、やっぱり奥深い。

（総務課編集係 俵餅）



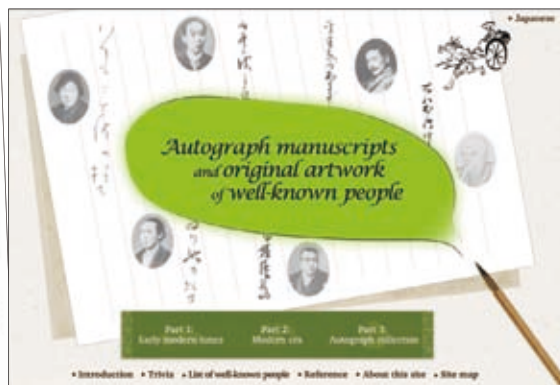
「縦書きがいいね」と
君が言ったから

NDL Topics

「電子展示会『あの人々の直筆』 英語版提供開始

4月18日から、ホームページ上の電子展示会「あの人々の直筆」英語版の提供を開始しました。電子展示会「あの人々の直筆」は平成26年秋に開催した企画展示「あの人々の直筆」をもとに作成したもので、日本の近世から昭和にかけて各分野で活躍した有名人約120人の書簡や葉書等の直筆資料を紹介しています。日本語版は平成28年8月30日に提供を開始しており、今回英語版を追加しました。

この英語版が、さらに多くの方々に「あの人」について理解を深めていただくきっかけとなれば幸いです。



<http://www.ndl.go.jp/jikihitsu/e/>

「国立国会図書館デジタルコレクション」に資料を追加しました

国立国会図書館は、3月14日に以下の約3万2千点を「国立国会図書館デジタルコレクション」に追加しました。

これにより、国立国会図書館が「国立国会図書館デジタルコレクション」で提供するデジタル化資料の総数は約265万点になりました。

「国立国会図書館デジタルコレクション」(<http://dl.ndl.go.jp/>) に追加した資料

コレクション	追加数	公開範囲*	
図書	約4,300点	館内限定	
雑誌	約1,400点	館内限定	
古典籍資料	約1,400点	インターネット	
憲政資料	約1,000点	インターネット	
日本占領関係資料	連合国軍最高司令部(GHQ/SCAP)文書	約17,600点	インターネット(一部館内限定)
	極東軍文書	約100点	館内限定
プランゲ文庫	図書	約1,400点	館内限定
録音・映像関係資料	録音資料	約100点	館内限定
	脚本	約3,000点	館内限定(一部インターネット)
他機関デジタル化資料	愛・地球博**	約300点	館内限定
	内務省検閲発禁図書	約1,300点	館内限定(一部インターネット)

*本文をインターネット公開していない資料についても、書誌事項(タイトル、著者等)はインターネットから検索できます。

**2005年日本国際博覧会に関するデジタル化資料です。動画を中心に、記録集(図書)も一部収録しています。

関西館の開館時間を30分繰上げました

関西館では、よりご利用いただきやすくなるため、平成29年4月1日から、開館時間を30分繰上げ、午前9時30分からとしました。

※なお、書庫資料の請求や複写の受付開始時間は、これまでどおり午前10時です。

4月1日以降の関西館の各種来館サービスの利用時間

*太字下線部は、開始時間を繰り上げたサービス

閲覧サービス	閲覧時間	9時30分 ～18時
	書庫資料請求の受付 (登録利用者のみ)	10時～17時15分
	資料取寄せの受付 (登録利用者のみ)	9時30分 ～17時30分
複写サービス	即日複写受付	10時～17時
	電子情報の印刷 (マイクロ資料の印刷を含む。)	10時～17時
	セルフ複写受付	10時～17時30分
	後日郵送複写受付 (登録利用者のみ)	10時～17時45分
資料案内 (レファレンス)		9時30分 ～18時
利用者登録受付		9時30分～18時

こどもの日おたのしみ会

国際子ども図書館では、5月5日のこどもの日に、おたのしみ会を開催します。

○日時 5月5日(祝)

13時30分～15時(各回40分程度)

○会場 国際子ども図書館 レンガ棟 3Fホール

○内容 おはなし(ストーリーテリング)、大型絵本の読み聞かせなど

○対象 4歳以上の方 各回30名程度(先着順、予約不要) ※子ども向けのイベントです。

○問合せ先

国立国会図書館 国際子ども図書館

児童サービス課 児童サービス運営係

電話 03(3827)2067



前回の様子

新刊案内

外国の立法 立法情報・翻訳・解説 第271号

特集「格差問題をめぐる主要国の立法」

労働力の革新及び機会に関する法律

— アメリカにおける就業支援の取組 —

欧州困窮者援助基金(FEAD)に関する規則

— 貧困克服を目指すEUの加盟国支援 —

イギリスにおける教育改革の試み

— アカデミー政策をめぐって —

フランスにおける平等と市民性に関する法律の制定

ドイツの連邦奨学金制度 — 職業資格の取得の助成 —

イタリアにおける労働規制改革

— 就労における格差への対応 —

ロシアにおける貧困対策

— ロシア連邦国家社会扶助法を中心に —

韓国の奨学金制度 — 所得連動返還型奨学金を中心に —

中国の慈善法と慈善事業の発展



A4 274頁 季刊 1,800円(税別)
発売 日本図書館協会
(ISBN 978-4-87582-798-6)

レファレンス 794号

待機児童対策の20年と現在の課題

地方税制の抜本改革をめぐる論点整理

— 課税自主権拡大と租税外部効果の観点から —

フランスにおける偽装携帯電話基地局を使用した通信傍受

法制

小特集「欧州各国における憲法の諸相」

ドイツにおける連邦政府内部の憲法適合性審査

—ベルリン調査報告—
英国憲法における国王と行政権
憲法改正手続の特例による憲法改正の是非
—イタリアとベルギーの事例—



A4 132頁 月刊 1,000円(税別)
発売 日本図書館協会

カレントアウェアネス 331号

水損資料を救うために
学校図書館をひらく

—東京・学校図書館スタンプリリーの試み—
ウェブアーカイブの活用に向けた動き

—世界の潮流とWARPの取組—
ドイツ国立図書館(DNB)におけるオンライン資料を対象にした自動分類
(動向レビュー)

デジタルリファレンスサービスの変化
共同運用による図書館システム導入の新たな可能性



A4 28頁 季刊 400円(税別)
発売 日本図書館協会

入手のお問い合わせ
日本図書館協会
〒104-0033 東京都中央区新川1-11-14
電話 03(3523)0812

平成28年度納本制度審議会オンライン資料の補償に関する小委員会(第1回)および第28回納本制度審議会

3月16日、平成28年度納本制度審議会オンライン資料の補償に関する小委員会(第1回) および第28回納本制度審議会が、審議会委員12名、専門委員3名が出席して東京本館で開催されました。

小委員会では、平成27年12月1日から開始された電子書籍・電子雑誌収集実証実験事業の現状について、事務局から報告を行い、質疑応答がありました。

小委員会終了後開催された審議会では、まず、第13回および第14回の代償金部会の調査審議の経過について、斎藤誠部会長が報告を行い、質疑応答がありました。また、事務局から、電子書籍・電子雑誌収集実証実験事業の現状について報告を行いました。この件について、小委員会における議論が福井健策小委員長から紹介され、質疑応答がありました。

納本制度審議会委員・専門委員名簿

(五十音順 敬称略) (平成29年3月16日現在)

会長

中山 信弘 明治大学特任教授 東京大学名誉教授

会長代理

福井 健策 弁護士

委員

植村 八潮 専修大学文学部教授

江上 節子 武蔵大学社会学部教授

遠藤 薫 学習院大学法学部教授

相賀 昌宏 一般社団法人日本書籍出版協会理事長

角川 歴彦 株式会社KADOKAWA取締役会長

齋藤 誠 東京大学大学院法学政治学研究所教授
齋藤 正明 一般社団法人日本レコード協会会長
鹿谷 史明 一般社団法人日本雑誌協会理事長
白石 興二郎 一般社団法人日本新聞協会会長
永江 朗 公益社団法人日本文藝家協会電子書籍出版検討委員会委員長
根本 彰 慶應義塾大学文学部教授
野原 佐和子 慶應義塾大学大学院政策・メディア研究科特任教授
平林 彰 一般社団法人日本出版取次協会会長
専門委員
佐々木 隆一 一般社団法人電子出版制作・流通協議会監事
三瓶 徹 一般社団法人日本電子出版協会事務局長
樋口 清一 一般社団法人日本書籍出版協会事務局長

○オンライン資料の補償に関する小委員会所属委員・専門委員
根本彰、佐々木隆一、三瓶徹、樋口清一



納本制度審議会の様子

審議会に関する情報は、以下に掲載しています。
<http://www.ndl.go.jp/aboutus/deposit/council/>

NDL Topics

おもな人事

△辞職▽

平成29年3月31日付け

専門調査員 調査及び立法考査局海外立法情報調査室主任 石川 武敏

専門調査員 調査及び立法考査局議会官庁資料調査室主任 福士 輝美

専門調査員 調査及び立法考査局行政法務調査室主任 山口 和人

専門調査員 調査及び立法考査局文教科科学技術調査室主任 小林 信一

専門調査員 調査及び立法考査局社会労働調査室主任 堀部 貢

△異動▽ ※（）内は前職

平成29年4月1日付け

専門調査員 調査及び立法考査局局長 専門調査員 調査及び立法考査局局長 総合調査室主任事務取扱 坂田 和光

専門調査員 調査及び立法考査局総合調査室主任 専門調査員 調査及び立法考査局総合調査室付 佐藤 毅彦

専門調査員 調査及び立法考査局議会官庁資料調査室主任 専門調査員 調査及び立法考査局議会官庁資料調査室付 山田 敏之

専門調査員 調査及び立法考査局文教科科学技術調査室主任 専門調査員 調査及び立法考査局海外立法情報調査室付 文教科科学技術調査室付兼務 豊田 透

専門調査員 調査及び立法考査局行政法務調査室主任（衆議院法制局第一部長） 大寺 康弘

専門調査員 調査及び立法考査局社会労働調査室主任（専門調査員 調査及び立法考査局社会労働調査室付） 岡村美保子

専門調査員 調査及び立法考査局総合調査室付（主幹 調査及び立法考査局総合調査室付） 岩澤 聡

専門調査員 調査及び立法考査局海外立法情報調査室主任（主幹 調査及び立法考査局海外立法情報調査室付） 原田 圭子

主幹 調査及び立法考査局総合調査室付（司書監 利用者サ-

ビス部付)

主幹 調査及び立法考査局社会労働調査室付（主幹 調査及び立法考査局経済産業調査室付） 小池 拓自

司書監 利用者サービス部付（利用者サービス部副部長、サービス企画課長事務取扱） 遊佐 啓之

主幹 調査及び立法考査局総合調査室付、国会レファレンス課長事務取扱（調査及び立法考査局国会レファレンス課長） 森田 倫子

主幹 調査及び立法考査局政治議会調査室付、政治議会課長事務取扱（調査及び立法考査局政治議会課長） 小林 公夫

主幹 調査及び立法考査局海外立法情報調査室付（調査及び立法考査局海外立法情報課長） 鈴木 滋

主幹 調査及び立法考査局海外立法情報調査室付（主幹 調査及び立法考査局社会労働調査室付、社会労働課長事務取扱） 泉 真樹子

△異動▽ ※（）内は前職

平成29年4月2日付け

専門調査員 調査及び立法考査局国土交通調査室主任（専門調査員 調査及び立法考査局国土交通調査室主任、農林環境調査室主任兼務） 山崎 治

専門調査員 調査及び立法考査局農林環境調査室主任 須藤 晋



1 東京本館中庭のツツジ

5月25日は納本制度の日

図書、雑誌、新聞、音楽CD、DVD、楽譜、地図……

国立国会図書館は、法律で定められた「納本制度」に基づき、日本で発行された出版物を広く収集しています。納められた出版物は、現在と未来の多くの読者のために、日本の文化的財産として、長く保存されます。

国立国会図書館では、昭和23年5月25日に最初の納本を受け付けたことを記念し、毎年この日を「納本制度の日」と決めました。

 国立国会図書館
National Diet Library, Japan

100年後もよみたい 

国立国会図書館は、納本をお待ちしています。

納本制度のページ <http://www.ndl.go.jp/jp/aboutus/deposit.html>
(国立国会図書館ホームページトップ>国立国会図書館について>資料収集・保存・納本制度)

○お問い合わせ先 国立国会図書館 電話03-3581-2331(代表)

NO. 673
MAY 2017

CONTENTS

- 01 <Book of the month - from NDL collections>
Poèmes de la Libellule—Seireishū dragonflies flown to Paris
- 04 Browsing library materials—A look at documents from medieval Japan, Part 1
A document from an arrogant sender?
- 07 Books not found in the NDL:
Periodicals deposited with the Home Ministry
- 12 Travel writing on world libraries: North America
- 19 Special lecture from the Training for Japanese Studies Librarians Outside of Japan held by the NDL 2017
Manga research in Japan
- 18 <Books not commercially available>
Umi o watatta nihoncha no kōkoku: Meiji · taishō · shōwa no kaigai muke shōsashhi
- 23 <Tidbits of information on NDL>
Because you told us that vertical writing looks really good.
- 24 <NDL Topics>

国立国会図書館月報

平成 29 年 5 月号 (No.673)

平成 29 年 5 月 1 日発行

発行所 国立国会図書館

印刷所 株式会社 丸井工文社

編集者 秋山勉

〒100-8924 東京都千代田区永田町1-10-1
電話 03 (3581) 2331 (代表)
FAX 03 (3597) 5617
E-mail geppo@ndl.go.jp
http://www.ndl.go.jp/

本誌に掲載した論文等のうち意見にわたる部分は、それぞれ筆者の個人的見解であることをお断りいたします。
本誌に掲載された記事を全文または長文にわたり抜粋して転載される場合には、事前に当館総務部総務課にご連絡ください。
本誌 517 号以降、PDF 版を当館ホームページでご覧いただけます。



NATIONAL
D I E T
LIBRARY
MONTHLY
BULLETIN
2 0 1 7 . 5

 国立国会図書館
National Diet Library, Japan

図

国

国

書

会

立

リサイクル適性[Ⓐ]
この印刷物は、印刷用の紙へ
リサイクルできます。